



# 草の唄

豊田都峰

京鹿子1000号記念出版

著者は自分の美意識の範囲  
以外のもものは句に詠まない  
美事なほどの徹底ぶりが  
都峰俳句の原点である

竹秋や  
夕日はいつも  
ななめなり



春の逝く思ひに吉野門くぐる

花影に漱ぎ名妓に合掌す

手をあげて別れしよりの夕かなかな

夕風の草に立ちゐる盆のころ

墓の径ことしも会ひ得し赤のまま

橋ひとつ渡ればともり西鶴忌

山眠るつらなることをよしとして

磯千鳥いちばんとほきものは沖

冬木径すき間だらけの影つれて

冬日影すこしこぼして鳥の二羽

花ざかり同じぶんだけ裏とかげ

日をひとつほりあげてゐる花曇

おかげさまとまをせばみ寺花あかり

ひともとのみやまざくらは女院陵

花ざかり同じぶんだけ裏とかげ

日をひとつほりあげてゐる花曇

おかげさまとまをせばみ寺花あかり

ひともとのみやまざくらは女院陵

大文字わが風景の真ん中に

爆忌来る蛇口に絶えることはなく

ねこじやらしわが一隅の風のなか

夕蟬や石仏もまたうすれゆく

おはぐろのみちびいてゐる水の音

草先のとんぽよ愛宕より高し

流木のなかば埋れて晩夏なる

また石に座して晩夏の水ほとり

秋高し句碑また高き座を得たり

丘の上の一草として月に侍す

月あげて影ひくものほそかりき

葛を掘る山のひびきに触れまして

鴨食ふや夕さざなみにゆれもして

道さそふ芽吹く林のひるさがり

芽吹けりと鳥かげのまた大きかり

春めくと踏み入る雑木らのあはひ

雪のきて丘の木立のこむらさき

雪もやのまたからまつを生みにけり

一本のしらかばゆゑの雪の暮

冬茜野末に一樹置かれゐる

鴨のこる淡海てふ名をすてがたく

草おぼろにじむことなき母の燭

さくら貝ひろひしよりのとほさかな

さくら貝白き詩集の序となさむ

ねむ咲くや夢に入りくる水の音

合歡咲いて谷の扉ひらけひらけゆく

糸とんぼ風あやを抜け水あやへ

こもれ日に蝶同化して幕のあく

鉾  
囃  
子  
高  
澄  
み  
町  
屋  
の  
宵  
あ  
か  
り

源  
流  
の  
ふ  
か  
み  
へ  
お  
ち  
て  
ゆ  
く  
蛍

螢火の奥処を知りしよりのこと

峠路は雲もろともに飲む麦茶

百  
日  
紅  
白  
塗  
地  
蔵  
は  
辻  
守  
り

正  
面  
に  
里  
山  
据  
ゑ  
し  
夏  
座  
敷

置かざるを旨としてより夏座敷

どこむくも正面として鉾すすむ

竹の葉のひとつ高舞ふひぐれどき

鷺の曳く風ひとすぢを涼しとす

「俳句四季」創刊25周年記念シリーズ  
四季現代叢書 15

---

句集 草の唄 くさのうた

発行 2007年11月10日

著者 豊田都峰 © T.Toyoda

発行者 松尾正光

発行所 株式会社東京四季出版

〒160-0001 東京都新宿区片町1-1-402

電話 03-3358-5860 振替 00190-3-93835

印刷所 西武印刷株式会社 本文DTP 西井洋子

定価 2600円 (本体2476円+税)

---

ISBN 978-4-8129-0529-6

Printed in Japan